

序論

「スポーツマンシップにのっとり正々堂々と戦うことを誓います。」今はこの文言に、もっと工夫が凝らされているであろうが、これが選手宣誓から最初に連想される文言ではないだろうか。選手宣誓の一番ポピュラーな文に使われている「スポーツマンシップ」という言葉だが、はたしてスポーツを行っている人たちの中にこの言葉の意味が分かる人はいったいどのくらいいるのだろうか。サッカー歴 12 年、今もなお現役でサッカーを続けている E さんに「スポーツマンシップってなんですか」と聞いてみたところ、「よくわからないけど、全力でプレーすることじゃないかな」と返ってきた。いかにも現役でスポーツをされている方らしい返事だ。全力とは簡単な言葉のように思えて難しい。常に本気を出すということだからサッカーに対する姿勢などがこの言葉から感じ取れた。他にも聞いてみたがスポーツをしている方の意見では、どうもプレーに対する内容が多く上げられた。例を挙げるとフェアプレーをすること、ルールにのっとりプレーすることなどだ。だったらスポーツマンシップなどという難しい言葉を使わず、フェアプレーや全力プレーなどもっとわかりやすい言葉を使えばいいと思ったが、逆にこの言葉が存在する意義も他にあるのではと考えるようになった。

本論

スポーツマンシップという言葉辞書で引いてみよう。小学館・新選国語辞典ではスポーツマンシップを「正々堂々とたたかう、運動競技者の精神(1)」とある。次に web 上の辞書、YAHOO 辞書、国語辞書では「正々堂々と全力を尽くして競技するスポーツマンとしての態度・精神(2)」とあり、次に電子辞書の大辞泉から引いてみると YAHOO 辞書と全く同じ言葉が載っていた。一般的な本の辞書、web 上の辞書、電子辞書と多角的に見てみようといろいろな種類の辞書を見てみたが、結果として正々堂々、明るく、スポーツマンとしてなど、一見良い言葉に見えて、的確にこの言葉を説明している文はなく、それなりの言葉が並ぶばかりだった。これでは本質が見えてこない。しかし、一つの辞書だけは他の辞書と違ったニュアンスの言葉を載せている物があった。

三省堂・新明解国語辞典では「フェアプレーをし、勝負にこだわらない明るい健康な態度・精神(3)」とあった。小学校から 14 年間、今も現役でサッカーをしている私には、他と

は違い、明らかにスポーツを考える上で気になる言葉があった。それは「勝負にこだわらない」という部分だ。今までサッカーをしてきて、公式戦では負けては終わりだと言われ続けてきた私にとって、勝負にこだわらなく、明るく振る舞うことはスポーツとして成立するのかと疑問に思った。しかし、辞書にはこのように書いてあったので、このことを頭に入れつつスポーツマンシップについて調べていると、勝負にこだわらないスポーツが存在していたことがわかった。それは、スポーツ選手のプロ化が広がる前のヨーロッパでのことだ。

ヨーロッパにおいてスポーツとは、富裕層や貴族階級のコミュニケーションのツールとして発展していった。彼らのほとんどは、地域のスポーツクラブでスポーツを初めて触れる人が多いためスポーツの種目にも格差があった。起源がほぼ同じと言われるスポーツ、Union Football のラグビーと Association Football のサッカー。2つの Football を例にすると、ラグビーは紳士、貴族階級や富裕層などのアップークラスの人々が行っていたスポーツで、サッカーは野蛮人と呼ばれる労働者階級などのロウークラスの人々が行っていたスポーツとして分けられる。よく聞く話だがこれは本当の話で、つい最近までイギリスの紳士に「好きなサッカーチームはどこですか」と訪ねたところ「なぜ私がサッカーなんか」と返されることさえあった。同じようにラグビーでも、日本人は紳士の振る舞いやマナーができてないのに、ラグビーをしていると思っていると思われていた時代もあった。日本人にはこれらのことについて実感が湧かないかもしれないが、それもそのはず。日本におけるスポーツとは、文部科学省主導の元、学校体育で発展していったためを身分によって違うスポーツに触れるなんてことはなかった。アップークラスがよく行っていたスポーツ、ラグビーやテニス、体操だって日本では学校の部活などで、誰だって身分に関係なく触れることはできたのではないだろうか。このような形でスポーツに触れてきた私たちにとって、スポーツに階級が存在したことなど頭で解っていても実感は出来ないであろう。そしてロウークラスのサッカーは、アップークラスのコミュニケーションのツールとして発展したスポーツとは違い、早くから選手のプロ化が行われていた。

実はサッカーも他のスポーツと同じように、アップークラスのスポーツとして最初に行われていた。1871年に始まったイングランドのサッカー大会 FA カップは、設立当初アップークラスのスポーツだった。しかし、ボールがあったら楽しめるサッカーはお金のない労働者階級も楽しめ、次第にイングランド北部のロウークラスが力を付けてきた。そして、彼らにはある目標ができた。それは、サッカーでアップークラスに勝つことである。

彼らは身分の違いから社会ではいつもアップークラスに使われ、ときには人間と見なされないような対応をされていた。そんな彼らが唯一勝って上に立てる物がサッカーだったのだ。そのため、勝つためにはサッカーを練習することが必要と考え、世界では初めてであろう、仕事をしないで練習をしてお金をもらえる、サッカーのプロ選手が誕生した。その後、プロ化した選手の実態をつかめないサッカー協会は1885年に選手のプロ化を公認し、1888年にプロリーグ「フットボールリーグ」が出来たのが、サッカーのプロ化の起源だ。このような背景からサッカーはロウークラスのスポーツになっていた。いつしかプロ化したサッカーは、金と名誉のためのコミュニケーションのツールとして発展した、アマチュアリズムを掲げるスポーツから、スポーツによって金と地位を得る道具となり、辞書に出てきた「勝負にこだわらない」としていたアマチュアリズムを掲げるスポーツマンシップが通用しなくなっていった。アマチュアリズムが掲げる、スポーツとは人々が楽しくゆったりと行うものから、金と地位のための道具になりそうなスポーツに危惧を抱き、プロ化したスポーツの中にも、大切なアマチュアリズムを持つことに今日のスポーツマンシップの原点を感じた。

そんな、早くからプロ化されたサッカーは、プロ化されたのが遅い他のスポーツより、今もアマチュアリズムが乏しいと考えられている。それは、メディアなどが、反則プレーや、試合前後の会見などに対して、他のスポーツに比べて必要以上に報道し、それを見た視聴者やスポーツ専門家から批難を浴びることが多いことから考えられる。

ラグビーのプロ解禁はサッカーより約1世紀遅れて1995年に、北半球の6カ国対抗リーグに出場している、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランド、フランス、イタリアと南半球のニュージーランド、オーストラリア、南アフリカで行われた。プロ解禁という言い方をしたのはリーグがプロ化したのではなく、プレーに対する選手への報酬を認めたことからだ。そして日本にもその流れはやってきて6年遅れで2001年にプロ化されたといわれているがプロ化ではなくオープン化と言った方がいいだろう。こちらも他国のプロ解禁と同じで、選手にプレーによる報酬を与えることを認めた。しかしリーグ、チームはそうではなく、プロ契約選手もいれば社員選手もいる。チーム名には企業名が付き、結果的にプロとアマチュアの垣根がなくなっただけだ。こんなに慎重になっているラグビーのプロ化だが、慎重になっているからこそプロ化しても残されている大事な精神がラグビーには存在する。

サッカー以上に体と体の接触プレーが多いラグビーだが、サッカーよりルールに反した、

プレー以外の争いが少ない。そしてノーサイド。ラグビーでは試合終了をノーサイドと言う。これは、試合が終われば敵、味方の区別がなくなることに由来している。これはノーサイドの精神とも言われ、ラグビーが高貴でアマチュアリズムも共存しているスポーツであることがわかる。ラグビーとサッカーを比べると、やはりサッカーの方がアマチュアリズムに欠けていると思う他無いが、その他のスポーツと比べても、サッカーはアンフェアなことに対して批難の浴び方が強く感じる。

野球ではよく乱闘騒ぎや侮辱行為を目にする。あまり接触プレーがないからよけい目立つことはあるかもしれないが、それにしてもすぐ乱闘になる。しかし、乱闘に対してのメディアの反応はなぜかあたたかい。広島カープのブラウン監督は監督退場記録などでも有名だが、退場の仕方もまた凄まじい。ときには判定に納得できずホームベースを砂で埋めたり、ベースを外して投げたりもしていた。当然、制裁金や罰則などもあったが、なぜかメディアからとてつもない批判には合わず、むしろ記録更新かとおもしろおかしくお茶の間に伝えていた。サッカーでこのような真似をしたらファンから白い目で見られ、世界各国から笑い者にされるのは考えるに及ばない。ではどうして、サッカーはこのようにアンフェアな反則などに対して厳しい目で見られるのだろうか。それには2つの要素が考えられる。

1つ目は、ラグビーや野球はアップークラスのスポーツということが大きな要因ではないかと考えられる。アップークラスの人々は規則やマナーを熟知しており、スポーツで規則を破る者がいても、私生活などの行動に影響されるものは少ない。そしてアップークラスのスポーツは先ほども出てきたが遊びという意識が大きいいため、試合にはショー的な要素が含まれる。ショーを楽しむための1つのイベントとして乱闘があるくらいにしか見ていない。むしろ、そのように見ているため野球における乱闘はそこまで問題にならないのだ。

2つ目は、サッカーが世間や子供、人々に与える影響力が関係している。国際サッカー連盟（FIFA）は国際オリンピック委員会（IOC）の加盟国、団体よりも多く208団体が加盟している。団体というのは、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドのイギリスの4協会はFIFAより早くから発足していたため特権的な地位があり、別々に加盟しているためである。そしてこの加盟団体数は国際連合の加盟国数を上回る。これほどサッカーは世界的に影響のあるスポーツだがロウークラスのスポーツのため、常識や世間を知らず、プロ選手の中にはサッカーで金と地位を手に入れようとしていた人

が多くいたため、試合は大荒れだった。ラグビーのように試合後、相手を敬う気持ちはあまりなかった。そして、プロ化の影響からアマチュアの選手がプロ選手の影響を受けやすくなっている。日本でも、元アルゼンチン代表のマラドーナと同じ靴ひもの結び方をすることが流行り、ベッカムの髪型が流行ったように、プロサッカー選手がアマチュア選手や世間に与える影響は計り知れない。その中でも一番影響を受けるのはプロになることを目指し、一途にサッカーに取り組む子供たちだろう。こんなに影響力のある選手の多くが、先程述べたように金のためだけ、地位のためだけにプレーしてしまうと、それを見たアマチュア選手や多くの子供たちも同じ様な行動をしてしまう。そのため早くからプロ化されたサッカーは、他のスポーツよりも厳しい目で一つ一つのプレーや試合後の対応を監視し、世間にその行動の愚かさを説かねばならなかった。そこで説かれたものこそが、今にも続くスポーツマンシップの内容や意識につながっていると私は考える。ここで感じたスポーツマンシップを定義付けると、スポーツマンシップとは、金と地位のためだけにスポーツをするのではなく、一つの物、一つのプレーに対して努力する一途な姿と、試合後には敵味方関係なく敬い合うことではないだろうか。

スポーツマンシップとはグラウンド内だけではなくグラウンド外にも影響することが解った。ここにグラウンド外で影響力をもった、貴族階級の学校、パブリックスクールでの話を紹介したい。パブリックスクールとは、先程紹介したように貴族階級の方たちが通う学校なのだが、これまた私たち日本人には想像はできないだろう。日本で例えるなら、慶應大学の付属校や学習院大学の付属校を想像したかもしれないがもっと異次元の貴族の世界を想像してもらいたい。日本の高校なら入試の仕方や中高一貫など形式はいろいろあるが、どんな方でもどの高校にも入学することは可能だろう。しかし、パブリックスクールは、昔のパブリックスクールはそうはいかない。親の身分や社会的地位が考慮され、学校は基本全寮制である。例えるならば日本の学校より、ハリーポッターに出てくる魔法学校に近い。そんな学校で、19世紀に教育の一環としてサッカーが取り入れられた。それまで、パブリックスクールで行うスポーツはほとんどが個人競技で、体操やテニスなどが行われていた。そんな中にサッカーはやってきた。子供はスポーツに分け隔てなど付けず、サッカーを大いに楽しんだ。そして競技として成立してくると、次第に学校対抗でサッカーが行われた。他校に負けたくない子供たちは、競技力の個人能力以外にもチームワークが大切だと考えるようになり、団体行動を重要視した。パブリックスクールといっても年頃の高校生に変わりはない。いつもは素行が悪かった生徒たちが、私生活の団体行動を重要視しなければ

チームワークが良くなることはないと考えることにより、風紀の乱れがなくなっていった。このように、チームワークのために、そのスポーツのために私生活が良い方向へ改善されることが多々ある。

アルゼンチン代表でマンチェスター・ユナイテッドから 2009 年に 42 億円の移籍金でマンチェスター・シティーに移籍し、10 代の頃からマラドーナ 2 世と言われ続けてきたカルロス・テベスは、アルゼンチンの危険地区ブエノスアイレスの最も危険とされる街、ビラ・フエルテ・アパचे出身である。この街にはサッカーチームは存在せず、近所の路地でいわゆるストリートサッカーという名の格闘をしながらサッカー選手を夢見た。そんな彼らが大好きなサッカーは、スポーツや遊び以外に、非行から子供を守る要素もあった。サッカーをやるために非行をしない。サッカーをしたいからギャンググループに入らないなどサッカーの持つ影響力はスポーツ以外の教育という分野にも大変大きな役割になっていた。人はみな心の拠り所が必要だ。その拠り所があるから、そのためには悪いことには手を出さない。一般的には宗教がその役割をしていて、だからこそ宗教はなくならないように、スポーツにもスポーツマンシップとして彼らの、多くの人たちの心の拠り所と自然になっていた。

結論

今まで大きく分けて 3 つの事例からスポーツマンシップの本質について考えてきた。1、アマチュアリズムにおけるスポーツマンシップ。2、プロ化されたことにより、周囲に与える影響から考えられたグラウンド内外でのスポーツマンシップ。3、スポーツが私生活にも影響を与えた、悪事から身を引くなどの良い教育もスポーツマンシップである。この文章の大まかな内容が出来そうな頃、ずるい私はスポーツについて日夜研究している尚美学園大学の早川武彦先生に「スポーツマンシップとは何ですか」と質問した。そしたら冗談好きの先生は、「3 時間くらいかかるけどいいかい」と前置きして「わからない」と答えた。正直私は驚いた。教壇でスポーツについていつも論じている先生の答えと、私がこの文章を考える前に質問した、早川先生の授業を受ける生徒の答えと一緒にことに。なぜだろうと思う半分、「わからない」という言葉の中に意図も見えた。そもそもスポーツマンシップという言葉の良い意味だけに捉えるのは間違っている。スポーツマンシップという言葉があるからこそ、アンフェアなプレーや相手を敬わない発言に対して、「スポーツマンシップ

に反している」の一言で片付けてしまう傾向がある。本当に大事なことはやってしまった、発言してしまった言動についてどこが悪かったのか、何が悪かったのか、その中身について考えることだ。人間誰しも間違いはある。その間違いをまた起こさないようにするのが、教育であり真理であるのではないだろうか。このようにスポーツマンシップについてはさまざまな考え方がある。スポーツの形式が時代に合わせて多様化した現代、いつの時代にも、誰にでも当てはまるスポーツマンシップの本質の定義については、まだ私はわからないし、これからもわかりそうにない。早川先生は、私にまだまだスポーツマンシップについて考える余地はあるということ気付かせるために、わからないとお答えになったのかもしれない。それほど、このスポーツマンシップという言葉は奥が深くて難しい。しかし、わからないからこそ見えてきた私の中のスポーツマンシップの本質も存在した。私なりのスポーツマンシップの本質について最後に述べ、この文章を締めたい。それは、「スポーツマンシップについて、自分なりに考える、その過程こそがスポーツマンシップの本質である。

7200 文字

ごく短い引用箇所についてはリーダービリティを優先し、出典については「参考文献」記した。

引用文献

(1) 小学館・新選国語辞典 (第 8 版、2002 年 1 月 1 日発行)

編者：金田一京助

佐伯梅友

大石初太郎

野村雅昭

(2) YAHOO 辞書 国語辞典 小学館・大辞泉 (1998 年舗装・新装版)

監修：村松明

<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?enc=UTF-8&stype=1&dtype=0&p=スポーツマンシップ>

(3) 三省堂・新明解国語辞典 (第 6 版、2005 年 1 月 10 日発行)

編者：柴田武

酒井憲二

倉持保男

山田明雄

参考文献

Sports Graphic Number 10 月 1 日号 737

<http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%CE%A1%BC%A5%B5%A5%A4%A5%C9>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/国際サッカー連盟> (wikipedia)

【要約】

選手宣誓でしか使われないスポーツマンシップという言葉がある。スポーツを行っている人でも正確な意味はわからない。辞書で引くと一つの辞書の一カ所だけ変わった部分がある。それは勝負にこだわらないというところ。そんなスポーツが存在するのだろうか。昔のヨーロッパにはアッパークラスの娯楽としてのスポーツが存在した。これをアマチュアリズムのスポーツと言う。アマチュアリズムにおける勝負にこだわらないといったスポーツマンシップはプロ化により消滅した。プロ化により金や名誉のためにスポーツを行い、楽しむよりも勝つこと優先になった。プロ化の早いサッカーはアマチュアリズムを失いかけているにも関わらず影響力がある。アマチュア選手や子供たちへの影響を考え、スポーツ選手は一途に取り組む姿と対戦相手を敬うことを大事にするべきだ。このことをグラウンド外にも持ち込むことによりスポーツで私生活が改善される。これがスポーツをやる人の心の拠り所となり悪事の誘惑から守ることに発展した。しかしスポーツマンシップとはいいことばかりではない。この言葉により悪いことの中身を考えなくなる。スポーツが多様化した現代、万人に定義付けられるスポーツマンシップはない。スポーツマンシップを考えることが一番大事であろう。

532 文字

【検索ワード】

- ・ スポーツマンシップ
- ・ 世界のスポーツ
- ・ スポーツのプロ化
- ・ サッカーのプロ化
- ・ ラグビーのプロ化